

浅科村文化財調査報告 第11集

いり さわ
入の沢遺跡

—— 村道悪地山線農道改良工事に伴う発掘調査 ——
あくじやま

1997

長野県北佐久郡
浅科村教育委員会

序

浅科村は、豊かな自然環境に恵まれ、古来から生活の営みの中で文化を育んできました。村内には、入の沢遺跡のような埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が57箇所ほどあります。現代の私たちは、このような先人の遺産を調査することにより、当時の社会や人々の暮らしぶりを明らかにし、また、私たちとの関わりについても深く考えることができます。

今回の調査は、村道改良工事に伴う緊急調査として、平成8年6月に、浅科村教育委員会が主体となって実施しました。調査区は、姥ヶ沢川^{うばがさわ}と女石川^{おんないし}に挟まれた山裾に位置しています。

調査の結果は、ピットと呼ばれる柱穴2基と縄文土器がわずかに出土したに過ぎません。しかし、周囲には縄文時代の石器が多量に散在している地点が、また、古墳時代後期につくられた入の沢古墳も存在することから、今回発掘調査を実施した場所の付近には、多くの遺跡が、未だ日の目を見ること無く眠っていることが予想され、今後の考古学的研究に期待される遺跡であると言えます。

本報告書は、発掘調査及びその成果を図版を付してまとめた冊子です。本書が、教育資料、地域史研究の一助として多くの人々に活用され、また、村民の皆さんが埋蔵文化財に対して関心と理解を深める手引きとなれば幸いです。

平成9年3月

浅科村教育委員会

教育長 柳澤哲郎

例 言

- 1 本書は、長野県北佐久郡浅科村に所在する、「入の沢遺跡」発掘調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、村道建設に伴う事前の記録保存のために、浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎）が主体となり、次のように実施した。
遺跡名：入の沢遺跡
長野県史登録番号：浅科村No.32遺跡
発掘調査期日：平成8年6月29日～同年6月30日
発掘調査地：長野県北佐久郡浅科村大字桑山字入の沢950-1
発掘調査面積：600㎡
発掘調査組織：浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎、組織は本文第2頁に掲載）
発掘担当者：峯村袈裟雄（浅科村文化財保護委員会会長）・佐藤幸信（浅科村埋蔵文化財調査員）
- 3 現地の発掘調査、遺物整理・報告書刊行事業は、次のように実施した。
平成8年6月……………現地での発掘調査
平成8年7月……………遺物の洗浄・注記・図面類の整理
平成8年8月……………遺物の復元・実測・トレース
平成8年9～12月………図版作成・原稿執筆
平成9年1～2月………遺物写真撮影・報告書編集
- 4 現地での写真撮影は北原郁生、出土遺物の写真撮影は、小宮山が行った。
- 5 遺構のトレース、出土遺物の実測及びトレースは、小宮山が行った。
- 6 図版作成は、小宮山が行った。
- 7 本書の挿図の縮尺は、各々挿図に示した通りである。
- 8 挿図中の水系標高値の単位はメートルである。
- 9 本書の執筆は、小宮山、教育委員会事務局が行い、峯村が校閲した。
- 10 本書の編集は、浅科村教育委員会が行った。
- 11 出土遺物・図面・写真類は、浅科村教育委員会で保管している。
- 12 本書をまとめるにあたり、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝します。

（敬称略）

長野県教育委員会・浅科村役場建設課・金井 靖・浅野晴樹

目 次

序

例 言

目 次

第 I 章 発掘調査の概要	1
〔1〕 発掘調査に至る経過	1
〔2〕 発掘調査組織	2
〔3〕 発掘調査日誌	2
〔4〕 調査の概要	2
第 II 章 遺跡の立地と環境	4
第 III 章 検出された遺構と遺物	6
〔1〕 第 1 トレンチ	6
〔2〕 第 2 トレンチ	6
〔3〕 第 3 トレンチ	9
第 IV 章 付 編	10
〔1〕 表面採集遺物	10
〔2〕 平成 6 年度試掘調査出土資料	12
第 V 章 ま と め	15

図 版

挿図目次

第1図	遺跡位置図 (1/25,000)	1
第2図	トレンチ配置図 (1/1,000)	3
第3図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5
第4図	第1トレンチ実測図 (1/80)	7
第5図	第2トレンチ実測図 (1/80)	8
第6図	第2トレンチ出土遺物 (1/2)	8
第7図	第3トレンチ実測図 (1/80)	9
第8図	遺物散布地位置図 (1/2,000)	10
第9図	表面採集遺物実測図 (2/3)	11
第10図	試掘調査資料(1)(1/2)	13
第11図	試掘調査資料(2)(1/2)	14

表目次

第1表	周辺遺跡地名表	5
第2表	黒曜石剥片観察表 (表面採集資料)	11

図版目次

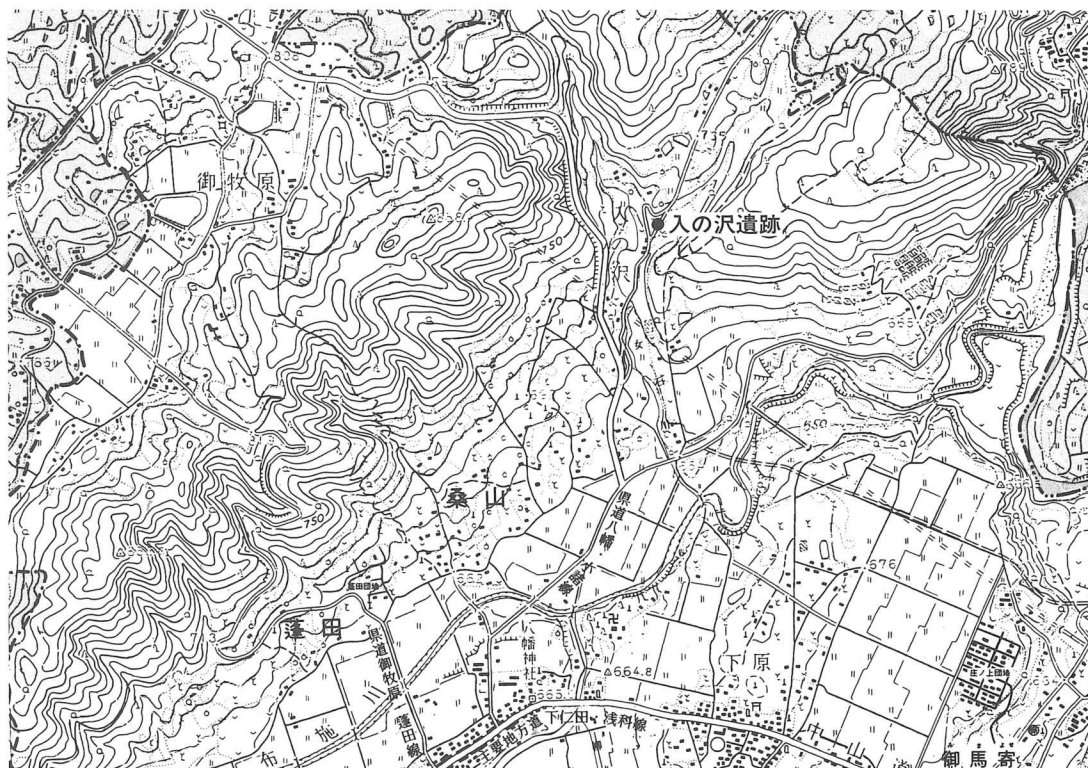
図版1	遺跡遠景 (南から) ・ 遺跡近景 (西から)
図版2	遺跡近景 (東から) ・ 発掘作業風景 (第1トレンチ)
図版3	第1トレンチ全景 (南から)
図版4	ピット確認状況 (南から) ・ 第2トレンチ (南から)
図版5	第3トレンチ (西から)
図版6	第2トレンチ出土遺物・表面採集資料 (石鏃・黒曜石剥片)
図版7	試掘調査資料

第 I 章 発掘調査の概要

〔1〕発掘調査に至る経過

農村地域として知られる浅科村では、その環境整備にも力を注ぎ、現在、村の北部に位置する悪地山地区の農道整備を進めている。平成8年度、ふるさと農道緊急整備事業の実施対象地内に、長野県史登録番号No.32の入の沢遺跡^{いりさわ}が該当しており、農道整備事業主体者の浅科村（村長：井出文男）と、浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎）で、文化財の取扱いについての事前協議を行った。農道整備事業は、農村地域に於ける行政施策の一環として急務であり、計画変更は事実上不可能である事から、村教育委員会では、農道整備事業実施に際しては、事前に記録保存のための発掘調査が必要である事を説明した。浅科村では、文化財保護の趣旨に基づき、発掘調査を村教育委員会に依頼すると共に、平成8年6月3日付け8浅建第214号で、文化財保護法第57条の3第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を文化庁長官宛てに提出した。また、村教育委員会は、平成8年6月3日付け8浅教第197号で、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出した。

長野県教育委員会からは、平成8年7月11日付け8教文第5-131号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で、工事着手前の発掘調査を浅科村教育委員会に委託の上、実施



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

するよう通知がなされた。

村教育委員会では、平成8年6月に調査体制を整備し、発掘調査の実施に至った。

〔2〕発掘調査組織

発掘調査及び報告書刊行事業（平成8年度）

調査主体 浅科村教育委員会（教育長：柳澤 哲郎）
調査担当者 峯村袈裟雄（浅科村文化財保護委員会会長、佐久考古学会会員）
調査主任 小宮山克己（日本考古学協会会員）
調査員 佐藤 幸信（浅科村埋蔵文化財調査員）
調査補助員 櫻木 悦子
調査協力員 小林利男・小林きく江
調査協力者 金井 靖（金井重機代表）
調査事務局 浅科村教育委員会
教育長：柳澤 哲郎
社会教育係 係 長：北原 郁生
書 記：高野 吉章

〔3〕発掘調査日誌

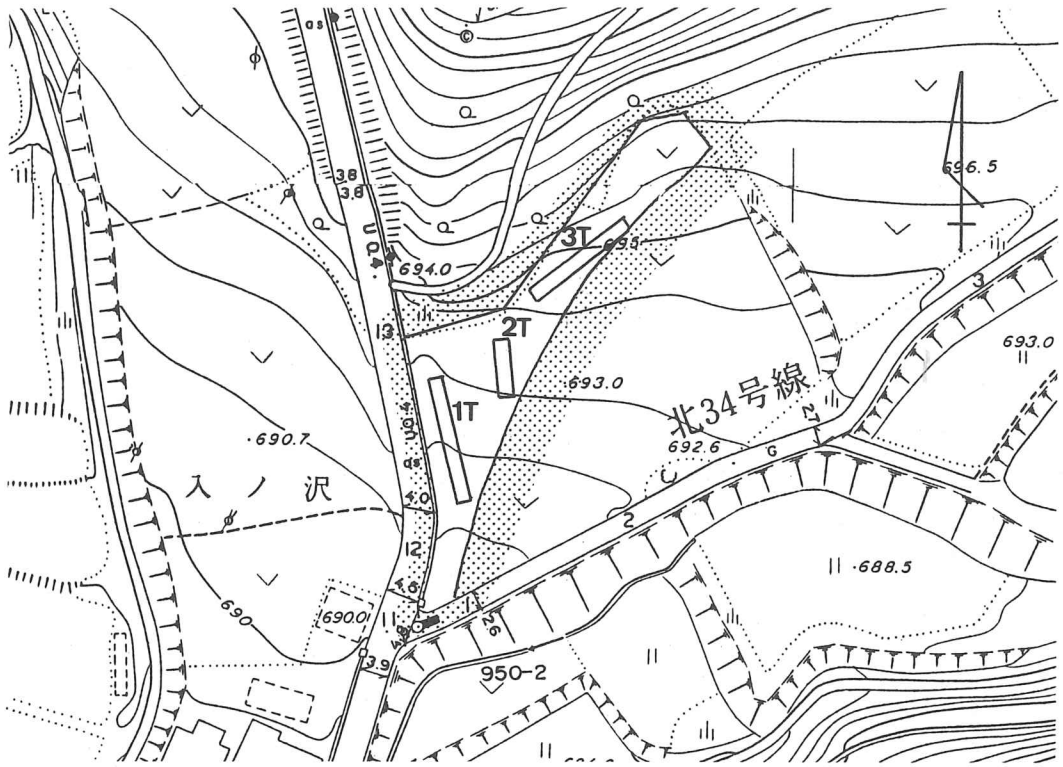
平成8年

- 5月 発掘調査担当者による現地踏査を数回実施する。今回の調査対象地よりも南西部分で黒曜石製の石鏃、剥片などを表面採集する。
- 6月1日 発掘調査担当者、調査員、事務局による調査対象地の踏査を実施し、具体的な調査方法などを現地にて検討する。
- 6月29日 調査区域内にトレンチを設定し、重機で表土掘削を行った後、人力で遺構・遺物の確認作業を実施する。第1トレンチではピット2基を検出。第2トレンチでは縄文土器の破片がわずかに出土した。平面測量図及び土層断面図を作成した後、写真撮影を行い、発掘器材を搬出して現地での調査を終了する。
- 6月30日 調査区の埋め戻し。図面などの整理を行う。発掘調査報告書刊行に関する打ち合わせを実施。

〔4〕調査の概要

今回の発掘調査は、道路建設予定地の形状に合わせる形で発掘調査区を設定した。入の沢遺跡は、地形的には北方から南に向かって延びる尾根上に位置し、西側には姥ヶ沢川、東側には女石川が南流し、南に向かって先細る地形を呈する。

発掘調査は、調査対象地内が北が高く、南に向かって傾斜する地形である事から、南北方向のトレンチを2本設定した（第1・2トレンチ）。また、これらのトレンチの東側で、計画道路が東へ迂



第2図 トレンチ配置図 (1/1,000)

回する部分については、東西方向のトレンチを設定した (第3トレンチ)。

発掘調査地点は、リング畑として利用され、以前の土地所有者である小林氏の話では、かなり深くまで耕作を行ったとの事で、重機で表土層 (耕作土) を掘削するのが適当であると判断し、層序を確認しながら掘削を行った。表土層以下では、黒色土を基調に、礫を多量に含んだ土層が検出され、この土層以下は、プライマリーな状態で堆積した土層であると認識された。慎重に重機で掘削を進め、岩盤を構成する砂岩粒子を多量に含む粘質で堅緻な土層に至り、この土層の上面で、遺構の確認作業を人力で行った。

調査の結果、第1トレンチ内でピット2基が検出された他は、遺構は確認されず、また、出土遺物も第2トレンチからわずかに縄文土器片が出土したのみであった。第3トレンチでは、耕作が深く、表土層以下では、堆積土層がほとんど残存せず、地山が露呈した。一部分で地山を深掘りしたが、ほぼ同じ地質の土層が続くものと判断された。

調査所見からは、遺跡の密度が薄い事が明らかになった訳だが、わずかに出土した縄文土器は、付近に集落遺跡の存在を予想させる十分な成果と言えよう。また、遺物を伴わないために時期の特定はできなかったが、ピットが2基検出された事から、東側に何等かの遺構群が分布する可能性が高いと思われる。

第II章 遺跡の立地と環境

浅科村は、佐久盆地の中央に位置し、西は蓼科山に連なる裾野、北は御牧原台地が広がる。北東から南東は小諸市・佐久市、西に望月町、北西には北御牧村にそれぞれ隣接する農村地域である。東側には、千曲川が北流し、河岸段丘が発達し、西高東低の地形を呈している。村の中央部では、粘性の強い土壌から成る平坦地が広がる。中央部には中山道が東西に走り、北寄りには北陸新幹線が通過している。近年の上信越自動車道や北陸新幹線の建設に伴い、豊かな自然に恵まれた農村地域にも開発の波が及びつつある。

村内の遺跡は、蓼科山に連なる尾根上や御牧原台地、千曲川や支流が形成する河岸段丘面に多く分布する。布施川右岸の土合遺跡では、以前より縄文時代中期の土器片が表採されていた。また、土合遺跡の対岸（千曲川左岸）地域でも、縄文時代中期から後期にかけての土器片が表採されている。千曲川左岸の段丘面に位置する中平遺跡・田中島遺跡は、広い範囲から縄文時代中・後期の土器片が散在しており、大規模な縄文集落の存在が予想される。

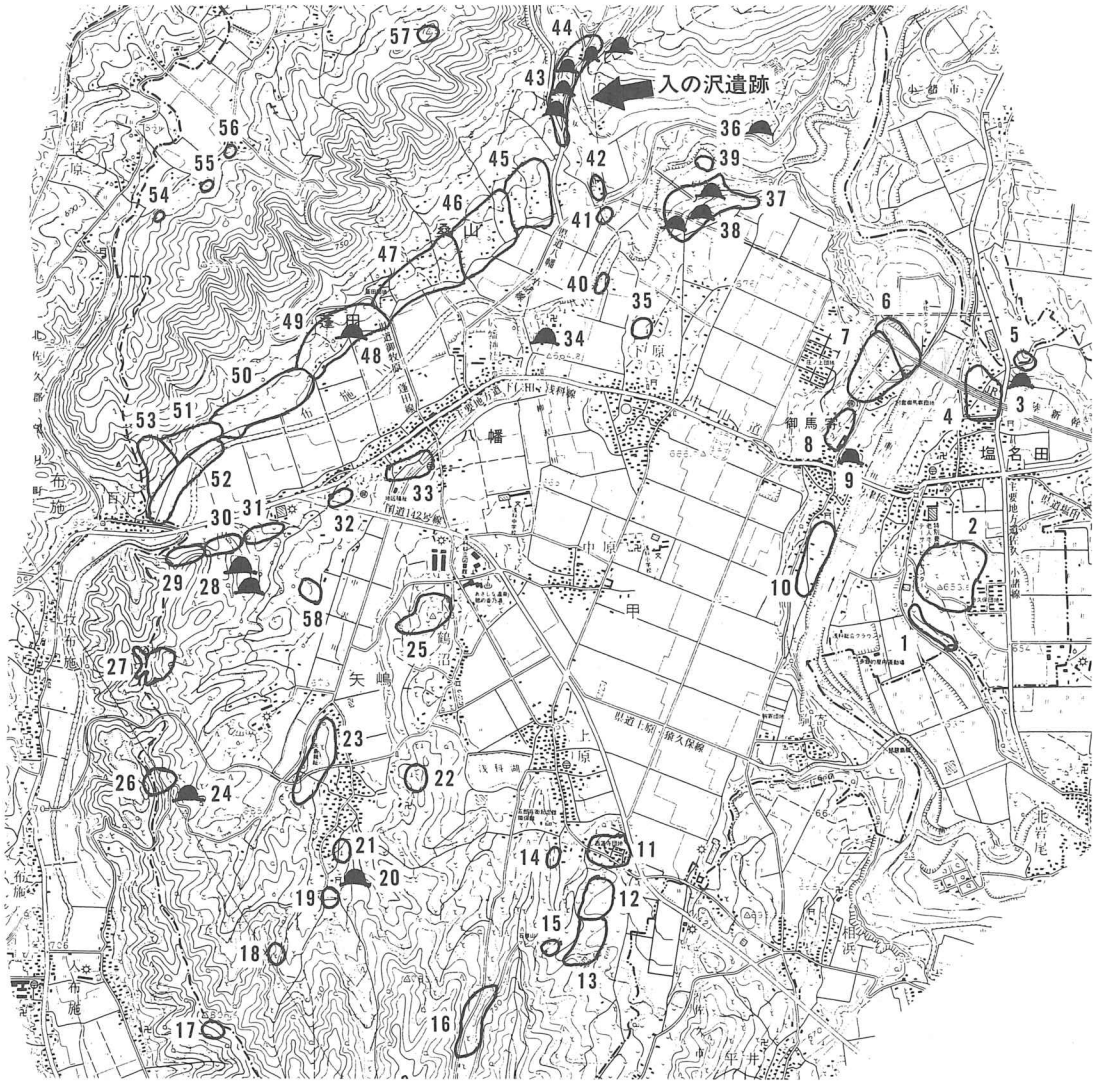
弥生時代の遺跡は、村内に11か所確認されている。いずれも後期の箱清水式期で、塩名田原、田中島、上の平、上屋敷、入の沢、明神平、大門先、天神平、須釜原などである。

古墳時代前期の遺跡では、千曲川左岸の砂原遺跡から、古墳時代初頭の住居跡が1軒検出されている。また、布施川流域の蓬田地区にある寺田遺跡からは、東海地方に出自を持つ「S字状口縁台付甕」の破片も出土している。古墳時代後期の砂原遺跡は、千曲川段丘下位面に形成された7世紀後半の集落跡である。発掘調査では、竪穴住居跡4軒と掘立柱建物跡が検出された。

古墳時代後期には、終末期の群集墳が多く認められる。塚原台地では洞口古墳が、舟久保段丘では原口古墳がある。土合1号墳からは円頭柄頭・銀象嵌鏝などが出土している。また、本遺跡の南側にも入の沢古墳が存在し、須恵器・土師器が出土している。

奈良・平安時代には、御牧原台地周辺で須恵器生産が本格化する。8世紀後半から窯跡の数が増えはじめる。この地で古代の窯業生産遺跡が形成される背景には、信濃国分寺造営との関わりも予想されよう。9世紀に入ると須恵器生産が本格化し、須恵器窯の操業が活発化する。また、牧に関連して、土手状の野馬除の柵が残存している。また、蓬田の八幡神社境内にある国指定重要文化財の高良社こうらしやは、高麗社の意と考えられ、渡来系氏族との関わりが想定される。

中世になると、当地域の豪族である矢島氏が、諏訪御符札古文書などに登場し、中世後期には、この地方の豪族の城館跡も多く認められる。近世には中山道が整備され、千曲川には塩名田宿が設置された。寛永3（1626）年には、小諸藩主から市川五郎兵衛が用水開鑿の許可を得て、「五郎兵衛用水」が開鑿され、村の中央部は現在のような田園地帯へと変貌し、土地の生産性も飛躍的に高まった。幕末期には矢島・桑山・蓬田・八幡・塩名田・御馬寄・市左衛門新田・五郎兵衛新田の八ヶ村であったが、明治9年に市左衛門新田と塩名田が合併して塩名田村に、明治22年には矢島・桑山・蓬田・八幡が南御牧村に、塩名田村と御馬寄村が合併して中津村がそれぞれ誕生した。昭和30年1月15日、南御牧村・五郎兵衛新田・中津村の3ヶ村が合併し、現在の浅科村が誕生した。



第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1 舟久保遺跡	13 打越窯址	25 権見山遺跡	37 土合遺跡	49 唐沢遺跡
2 塩名田遺跡	14 菖蒲沢窯址	26 細久保城跡	38 土合古墳群	50 中村遺跡
3 洞口遺跡	15 前林窯址	27 虚空蔵城跡	39 久保畑古墳跡	51 松ヶ沢遺跡
4 砂原遺跡	16 中荻久保遺跡	28 兜山古墳	40 山の田遺跡	52 寺田遺跡
5 五領城遺跡	17 布施氏城跡	29 砂山遺跡	41 駒込遺跡	53 西の平遺跡
6 中平遺跡	18 上山の神塚	30 島久保遺跡	42 山梨遺跡	54 尾尻遺跡
7 田中島遺跡	19 雨の宮遺跡	31 吹上遺跡	43 入の沢古墳群	55 須窯原遺跡
8 上の平遺跡	20 宮脇古墳	32 神明遺跡	44 入の沢遺跡	56 柳沢窯址
9 上平の塚古墳	21 上屋敷遺跡	33 宿遺跡	45 明神平遺跡	57 富士見塚
10 神平遺跡	22 天徳城跡	34 経塚古墳	46 天神平遺跡	58 大平遺跡
11 西連寺遺跡	23 矢嶋城跡	35 植木辺窯址	47 水地村遺跡	
12 一本松遺跡	24 茨尾根古墳	36 火の雨塚古墳	48 蓬田唐沢古墳	

第1表 周辺遺跡地名表

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

〔1〕 第1トレンチ

調査対象地の西側に位置する。地形の傾斜に合わせた南北方向に長いトレンチで、長さ17m、幅2m、深さは0.4~0.9mである（第4図）。

表土層直下に、第Ⅱ層の黒褐色土の分布が認められた。黒褐色土中には、拳大の円礫が多く含まれていた。人為的な遺構の可能性も想定し、人力で精査したが、第Ⅱ層中全体に円礫を含んでおり、自然堆積層と判断した。その後、重機で第Ⅱ層を除去し、第Ⅳ層上面で遺構確認作業を行ったところ、ピットが2基確認され、本遺跡内に於ける遺構確認面が第Ⅳ層上面である事が判明した。

なお、トレンチ南寄りで、北東から南西へ走る溝が検出されたが、近代以降に湧水地から水を引いた水路跡である。調査区の中央よりも南寄りで検出されたピットは、覆土の観察所見では第Ⅱ層に近い。出土遺物は見られず、年代は特定できないが、古代に属する可能性がある。また、トレンチの北部では、地山が窪み、当初は東西方向に走る堀状の遺構とも思われたが、壁面の土層観察では、第Ⅱ層の連続的な堆積である事から、自然地形の窪みと判断した。本トレンチからは、遺物の出土は見られなかった。

〈土層説明〉

第Ⅰ層 表土層（耕作土。）

第Ⅱ層 黒褐色土（拳大の円礫を多く含む。しまり弱い。）

第Ⅳ層 暗黄灰色粘質土層（地山層。砂岩の岩盤粒子を多く含む、しまり良い。）

第1層 溝覆土（黒褐色土で、粘性強い。保水性あり。）

〈ピット1〉

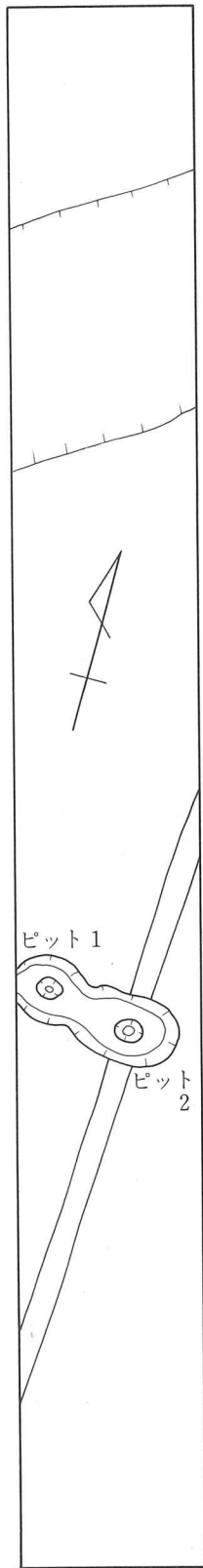
ピット2と重複するが、土層断面の観察からは新旧関係は確認できなかった。円形プランを呈し、82cm×72cm、深さ18cmの規模で、底面中央は段を持って28cm×24cm深さ7cm（一段目の底面から）に掘り込まれる。覆土は第Ⅱ層の黒色土と同様で、砂質気味である。出土遺物は見られなかった。

〈ピット2〉

ピット1の南東側で検出され、ピット1よりもわずかに細長く楕円形プランを呈し、104cm×76cm、深さ16cmの規模で、底面中央は段を持って29cm×25cm深さ8cm（一段目の底面から）に掘り込まれる。覆土所見はピット1と同様。出土遺物は見られなかった。

〔2〕 第2トレンチ

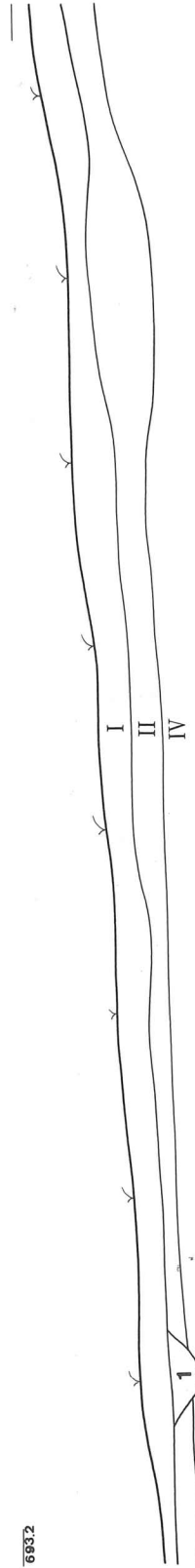
第1トレンチの東側約6mに位置する。第1トレンチ同様に、地形傾斜に合わせて南北方向に長く設定し、長さ8m、幅2m、深さ0.9~1.1mである（第5図）。



溝 (水路跡)

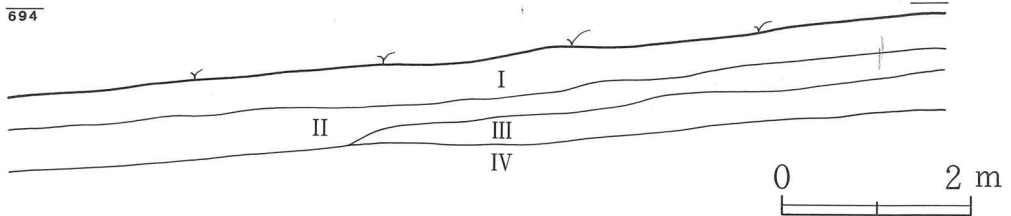
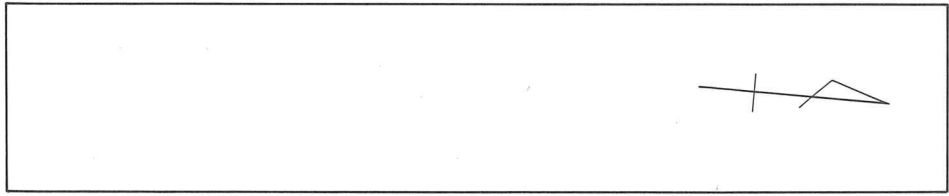
ピット 1

ピット 2

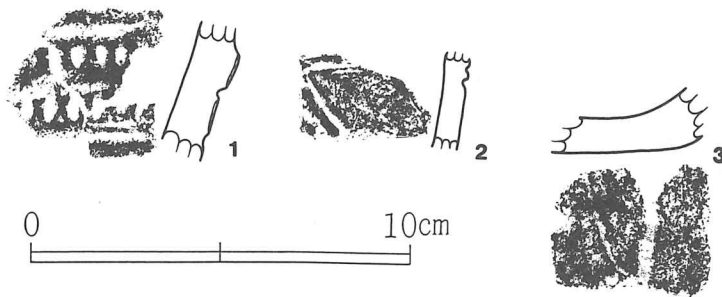


6632

第4図 第1トレンチ実測図
(1/80)



第5図 第2トレンチ実測図 (1/80)



第6図 第2トレンチ出土遺物 (1/2)

〈土層説明〉

第I層 表土層 (耕作土。)

第II層 黒褐色土 (拳大の円礫を多く含む。しまり弱い。)

第III層 暗黄褐色土 (漸移層で色調明るく、第II層との分層界は不整合に接する。砂岩の岩盤粒子を含む。)

第IV層 暗黄灰色粘質土層 (地山層。砂岩の岩盤粒子を多く含み、しまり良い。)

なお、第1トレンチの北部で見られた堀状の窪みは、本トレンチでは確認されなかったが、第1トレンチよりも地山までの深さは深く、ほぼこの堀状の窪みのレベルに一致する。第II層中からは、縄文時代の土器片が6片出土した。

出土遺物 (第6図)

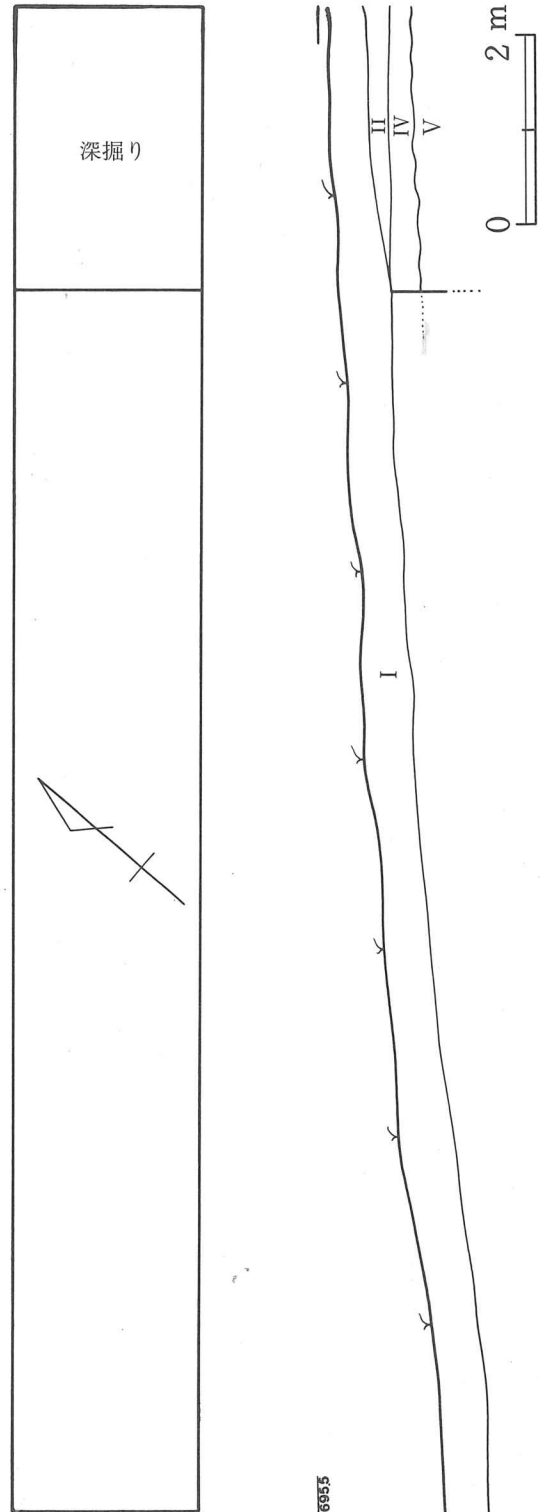
1は深鉢形土器の胴部破片である。横方向に隆線を貼付し、隆線上に浅い刻みを施す。隆線脇には沈線が巡る。暗茶褐色を呈し、微砂粒、白色粒子を多量に含む。2は横方向に沈線を巡らせ、斜めの平行沈線を施す。地文には縄文が施される。器面の状態は悪い。暗黄褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。3は底部破片と思われる。底部は丸みを帯びる。暗茶褐色を呈し、微砂粒、白色粒子を多量に含む。以上の土器は、縄文時代中期中葉の時期と思われる。

〔3〕 第3トレンチ

第2トレンチの北東側約6mに位置する。北から南に伸びる山裾の末端に位置し、地形の等高線に沿う状況である(第7図)。これは、この山裾に沿って道路が計画されており、その工事対象地の形状に合わせた事による。本トレンチは東西方向に長く、長さ16m、幅2m、深さ0.5~0.6mである。北側の山裾端部に位置し、地山までの深さは浅く、堆積土層も第II層が耕作によって失われている状況が確認された。本トレンチの東端で深掘りを行い、地山を掘り下げた。第IV層の下層で確認した第V層は、砂岩礫を含む粘質土で、両者は色調に差が認められるものの、ほぼ同質で、堆積も連続的である。遺構・遺物は確認されなかった。

〈土層説明〉

- 第I層 表土層(耕作土。)
- 第II層 黒褐色土(拳大の円礫を多く含む。しまり弱い。)
- 第IV層 暗黄灰色粘質土層(地山層。砂岩の岩盤粒子を多く含む、しまり良い。)
- 第V層 暗茶褐色粘質土層(地山層。砂岩の岩盤粒子を多く含む、しまり良い。)



第7図 第3トレンチ実測図(1/80)

第IV章 付 編

〔1〕 表面採集遺物

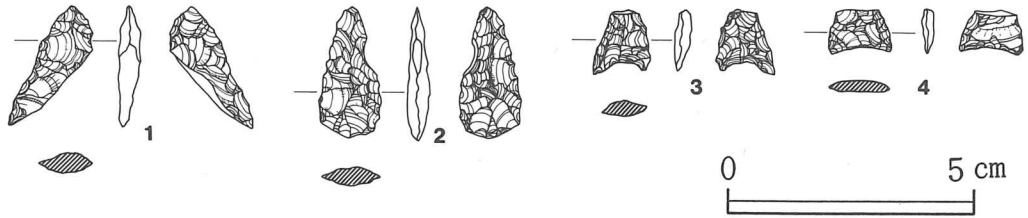
今回の発掘調査地点から、南西部約100mに位置する畑で採集された遺物をここに紹介する（第8図網掛け部分、斜線部は発掘調査区）。現況では畑地として利用され、概ね平坦な地形を呈し、南北約55m、東西約35mの範囲で、黒曜石の剥片・碎片が多く散在している。採集資料の中には、石鏃を含んでおり、縄文時代に属すると判断されるが、関連する土器片は見られなかった。

第9図1～4は、黒曜石製の石鏃である。いずれも欠損している。周辺からは黒曜石の残核や剥片、碎片が表採されている事から、この地で石器が製作されたと推測される。欠損した石鏃は、製作途中で欠損して廃棄された可能性も強い。

1は脚部を欠損する。現存値で長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ1.0gを測る。一部に不純物を含むが、石材の透明度は高い。2は一側縁に深い剥離が有り、基部調整も途中である。この側縁の剥離のためか、製作途中で放棄された可能性が高い。現存値で長さ2.6cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.0gを測る。石材は透明度が高い。3は先端を欠損する。凹脚だが、対照性に欠ける。現存値



第8図 遺物散布地位置図 (1/2,000) 網かけ部分。斜線は発掘調査区



第9図 表面採集遺物実測図 (2/3)

で長さ1.2cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm、重さ0.4gを測る。石材は透明度が低く、黒味が強い。4は先端を欠損する。基部の挟りは浅い。現存値で長さ0.8cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gを測る。石材は透明度が高い。

石鏃と共に多数の黒曜石製剥片・碎片が採取されている。これらの一部を写真図版(図版6)に示したが、第2表がその観察表である。

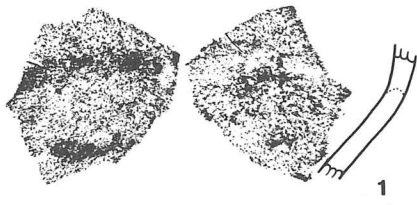
番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	観察所見等
1	2×2×1.2	2.3	一部に風化面を残す。透明度高い。
2	2.8×1.7×1.2	4.3	不純物を多く含む。
3	2.9×1.8×0.9	4.1	打撃痕複数有り。透明度高い。
4	2.1×1.5×0.8	3.4	一部に風化面を残す。不純物を多く含む。
5	2.6×1.9×0.9	4.4	透明度低い。不純物を多く含む。
6	1.6×1.4×0.3	0.7	不純物を多く含む。
7	1.3×1.2×0.2	0.4	不純物を多く含む。
8	1.8×1.1×0.7	1.6	不純物を含む。透明度高い。
9	1.4×2.2×0.3	0.5	透明度高い。
10	1.7×1.5×0.2	0.7	透明度高い。片面は風化面。
11	1.6×0.9×0.2	0.4	透明度高い。
12	2.1×1.8×0.4	1.4	透明度高い。
13	1.9×1.2×0.7	1.2	不純物を含む。透明度低い。
14	1.8×0.7×0.3	0.6	透明度高い。
15	2.2×1.2×0.2	0.7	透明度高い。剝離面は風化気味。
16	2.5×1.1×0.3	0.8	透明度高い。剝離面は風化気味。
17	1.6×1.4×0.3	0.7	片面は風化面。
18	1.7×1.6×0.5	1.1	透明度低い。片面は風化面。
19	2.2×1.1×0.4	0.7	透明度高い。
20	1.4×1.1×0.3	0.7	透明度高い。
21	1.6×1.7×0.3	0.6	透明度高い。
22	1.3×1.2×0.8	0.9	一部に風化面を残す。透明度高い。
23	1.3×1.3×0.2	0.3	透明度高い。剝離面は風化気味。
24	1.9×0.8×0.4	0.6	透明度高い。一部にリタッチ有り。
25	1.4×0.5×0.2	0.2	透明度高い。
26	1.7×0.8×0.3	0.4	透明度高い。
27	1.2×0.7×0.2	0.2	透明度高い。

第2表 黒曜石剥片観察表(表面採集資料)

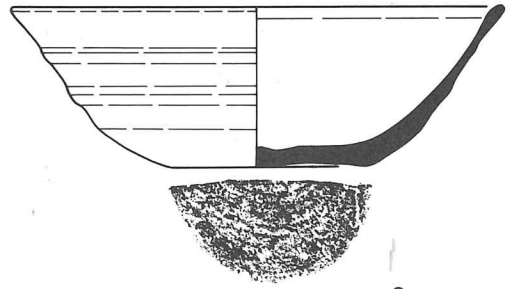
〔 2 〕 平成 6 年度試掘調査出土資料

平成 6 年、今回建設予定の農道よりも南側部分を建設する際に実施された試掘調査で出土した資料である。出土状態に関する実測図や写真といった記録は無く、遺物が教育委員会に保管されていたものである。遺物は平安時代の土師器・須恵器が主体で、黒曜石の剥片も含まれており、その一部を掲載する。

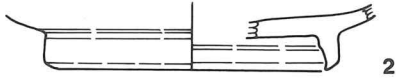
第10図1は弥生土器と思われる。器面の一部に器形が変換して屈折する部分が認められる。器面の状態が悪く判然としないが、外面は屈折部分から上は横、以下縦方向に、内面は横方向に研磨され、赤彩が施されている。内外面に赤彩が施される事から、鉢形或いは腰部が張る高杯と思われる。胎土に微砂粒を多く含み、胎芯は暗黄褐色を呈する。2は灰釉陶器の碗と思われる。推定で高台径7.2cmを測り、実測部分の残存率は約20%である。高台は「ハ」の字に弱く開き、先端は尖る。内面には重ね焼きの痕跡が認められる。左回転のロクロ成形で、底部は回転ヘラケズリ調整が施される。灰褐色を呈し、微砂粒をわずかに含む。平安時代、9世紀後半頃の時期と思われる。3は須恵器の坏で、推定で口径12.8cm、器高4.2cm、底径5.4cmを測り、実測部分の残存率は約40%である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕が認められる。底部から丸みを帯びて逆「ハ」の字に立上がり、口端はわずかに外反する。胎土に小石、微砂粒、角閃石を含み、色調は灰褐色～黒褐色を呈する。焼成は悪い。4はロクロ成形、酸化焰焼成の坏である。推定口径約14.4cmを測り、実測部分の残存率は約10%である。直線的に開く形態で、口端は先細る。口縁内面には口端部調整時の段を有する。胎土に微砂粒、赤色粒子、角閃石を含み、暗橙灰褐色を呈する。5は土師器坏で、内面には黒色処理が施される。推定口径約14.6cmを測り、実測部分の残存率は約12%である。全体に丸みを帯びて立上がり、口端は先細って外反する。右回転のロクロ成形で、内面にはミガキが施される。外面橙灰褐色、内面黒灰褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を含む。6は土師器坏で、内面は黒色処理が施される。推定口径約16.2cmを測り、実測部分の残存率は約8%である。直線的に逆「ハ」の字に立上がり、口端は先細って外反する。右回転のロクロ成形で、内面にはミガキが施される。外面橙灰褐色、内面は滑沢の有る黒褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を多く含む。7はロクロ成形、酸化焰焼成の坏の底部破片である。推定底径6.6cmを測り、実測部分の残存率は約20%である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕、内面には軟質木口状工具による同心円状の調整痕が認められる。橙褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子を多く含む。8は土師器坏で、内面は黒色処理が施される。推定底径約5.6cmを測り、実測部分の残存率は約25%である。外底部にはケズリ調整、内面は放射状にミガキが施される。外面橙褐色、内面は滑沢の有る黒褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を含む。9は土師器坏の底部破片で、内面は黒色処理が施される。底径約5.6cmを測る。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕、内面は放射状にミガキが施される。外面橙褐色、内面は滑沢の有る黒褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を含む。第11図10は土師器の片口鉢と思われる。右回転のロクロ成形で口端は角張る。橙褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を含む。11は土師器の甕形土器の口縁部破片である。口縁は受け口状を呈し、頸部は直立する。北武蔵型土師器甕の口縁部形態に似る。頸部には軟質木口状工具による横方向のナデ調整が施され



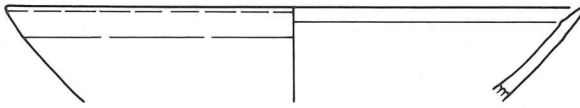
1



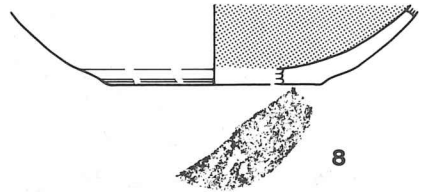
3



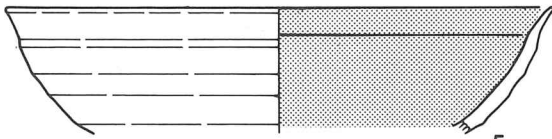
2



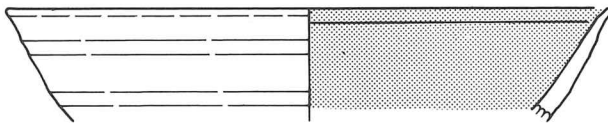
4



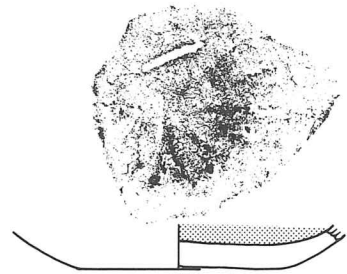
8



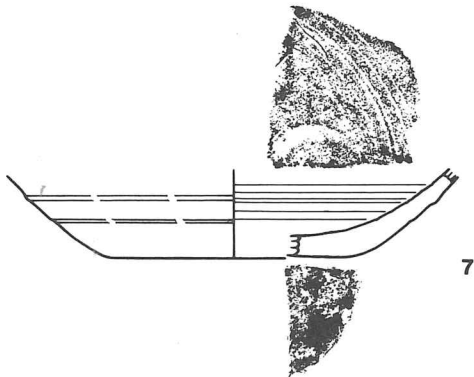
5



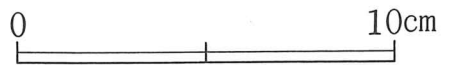
6



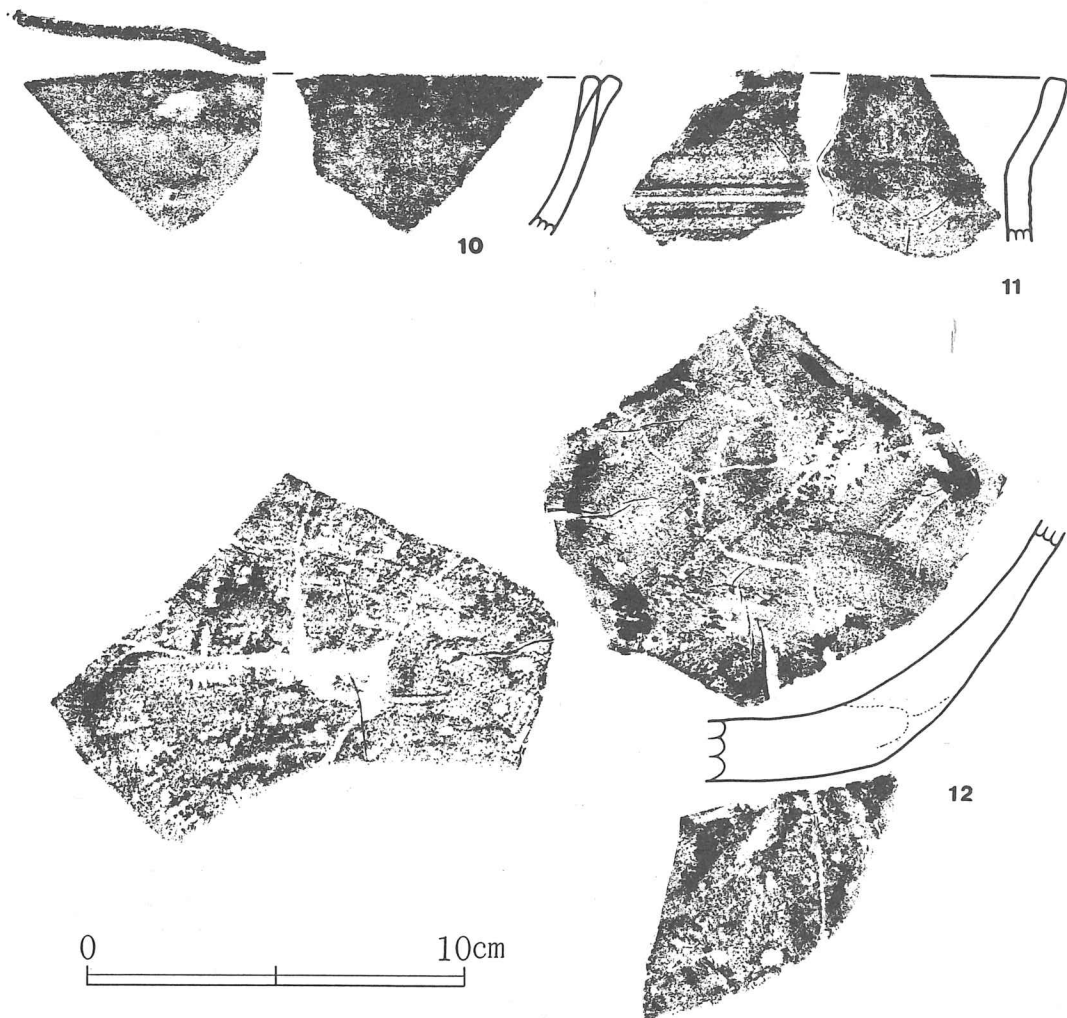
9



7



第10図 試掘調査資料(1) (1/2)



第11図 試掘調査資料(2) (1/2)

る。暗黄灰褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を含む。12は甕形土器の底部破片と思われる。厚手の土器で、外面にはケズリ、内面はナデ調整が施される。微砂粒、赤色粒子、角閃石を含み、外面暗橙褐色、内面黒褐色を呈する。

以上の資料は、若干の時期差が認められるものの、平安時代、概ね9世紀後半から10世紀初頭頃の所産と考えられる。

第V章 ま と め

1 調査のまとめ

今回の調査対象地内のトレンチ発掘の結果、遺構・遺物に特筆すべき点が少なかったものの、この付近の土層堆積状態が確認された事は、今後、周辺遺跡の調査を行う際に、大変参考になる記録である。

遺跡の種類としては、縄文時代の遺物散布地という事になろうか。しかしながら、調査地点の南西側には、縄文時代の石器が採集されており、遺跡が存在する事は紛れもない事実である。石器が散在する場所で、関連する土器がほとんど認められない。この事は、本遺跡が石器製作を主体とした遺跡であるという性格を暗示するものかも知れない。特筆すべき事象と言えよう。

また、遺物が出土しなかったために、年代を特定する事ができないが、第1トレンチからピット2基が検出された。今回の発掘調査区域の西側には、このピットに関連する遺構群が分布する可能性が高い事が予想される。遺跡の詳細については、今後の調査に期待したい。

2 入の沢遺跡周辺の考古学的状況

今回の発掘調査では、遺跡の様相について遺構・遺物からは、特筆すべき点が少なかったが、本遺跡周辺には、原始・古代遺跡の存在が多数確認されている。

今回の発掘地点の東側に広がるリング畑の中には、以前に古墳と思われる塚が存在したと言われている。また、姥ヶ沢川をさらに遡ると姥塚^{うばづか}と呼ばれる古墳の可能性のある塚の存在が知られ、南方の姥ヶ沢川と女石川が合流する付近には古墳時代後期の入の沢古墳がある。山際に位置する遺跡で、平坦地の面積は広いとは言えないが、湧水にも恵まれた本遺跡内には、さらに未知の埋蔵文化財が包蔵されていると思われる。第III章〔2〕に付編として、発掘調査地点の南西で表面採集された遺物及び平成6年に実施された試掘調査で出土した遺物（以下、試掘調査資料と呼ぶ）を掲載し、今後の研究の参考に供した次第である。

縄文時代資料としては、今回の発掘調査で出土した縄文時代中期の土器片程度で、具体的な様相については今後の調査に期待される。本遺跡周辺では、特に黒曜石の剥片の散在が濃厚であり、石鏃も混在する事から、縄文時代に属すると考えられる。関連する遺構や土器等の遺物を追及していく事で、具体的な遺跡像が明らかにされるであろう。剥片類には、石核・大型の剥片・破片が認められ、黒曜石製の打製石器を製作していた遺跡の可能性が強い。大型剥片が多く認められ、また、礫面（風化面）を残す例も多い事から、転石を持ち込んで加工し、製品を持ち出した可能性が予想される。

試掘調査資料中に1点ではあるが、弥生時代後期に属する鉢形土器の胴部破片が出土した。内外面に赤彩を施しており、箱清水式に比定される。該期の遺跡は千曲川流域に多く認められる傾向にあるが、本遺跡の様に山裾付近にも人々の生活領域が拡大していた事を物語る資料と言えよう。

古墳時代後期になると、入の沢古墳がつくられる。二つの河川に挟まれた山裾端部に立地し、南方に平坦地を臨む位置に立地している。村内に多数分布する群集墳は、6世紀後半以降に俄かに急

増し、この時期に、当地域の本格的な開発が行われたと考えられる。土合1号古墳（註1）からは円頭柄頭太刀、銀象眼が施された八窓倒卵形鐔等、畿内政権との関わりの強い遺物も認められ、奈良・平安時代以降の須恵器生産や牧の成立に関わる前段階の、政治・社会的な画期として理解されよう。

平安時代遺跡の具体的な内容については、発掘調査事例が少ないが、試掘調査資料中には、平安時代土器が多く含まれている。ロクロ土師器（ロクロ成形酸化焰焼成土器）や内面に黒色処理を施した坏も認められ、概ね9世紀後半～10世紀初頭にかけての資料と思われる。古東山道に面した寺田遺跡第2号住居跡の年代に近い資料と言えよう（註2）。内容的には土師器の甕・坏、須恵器の甕・坏、灰釉陶器の椀が認められ、付近には住居跡等の遺構が存在した可能性が高いと考えられる。

村内の遺跡については、考古学的調査の実施例が少ないため、不明な部分が多い。しかしながら、今回の様な規模の小さい発掘調査を含め、地道な調査の積み重ねによって、浅科村の原始・古代の様相が徐々に明らかにされつつあると言えよう（註3）。

註1 『土合1号墳の調査』 浅科村文化財調査報告第1集 浅科村教育委員会 1969年

註2 『寺田遺跡－古東山道・中仙道沿いの村－』 浅科村文化財調査報告第10集 浅科村教育委員会 1995年

註3 浅科村では平成9年度から遺跡詳細分布調査を実施する予定である。地域の歴史叙述に欠かせない原始・古代遺跡の様子を明らかにする上で、基礎的資料としてその成果が期待される。

図 版



図版 1



遺跡遠景（南から）



遺跡近景（西から）



遺跡近景 (東から)



発掘作業風景 (第1トレンチ)



第1トレンチ全景（南から）



ピット確認状況（南から）



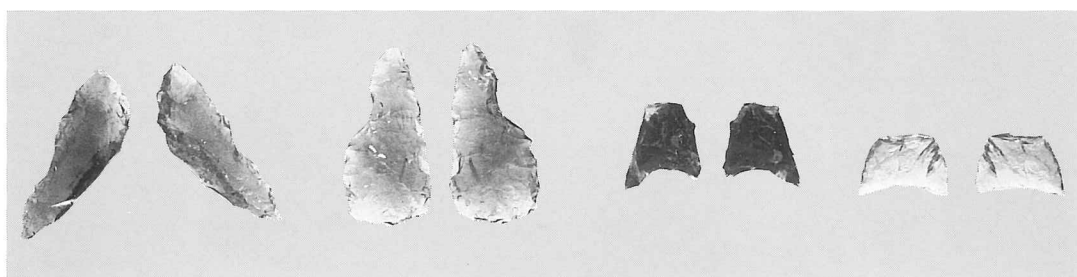
第2トレンチ（南から）



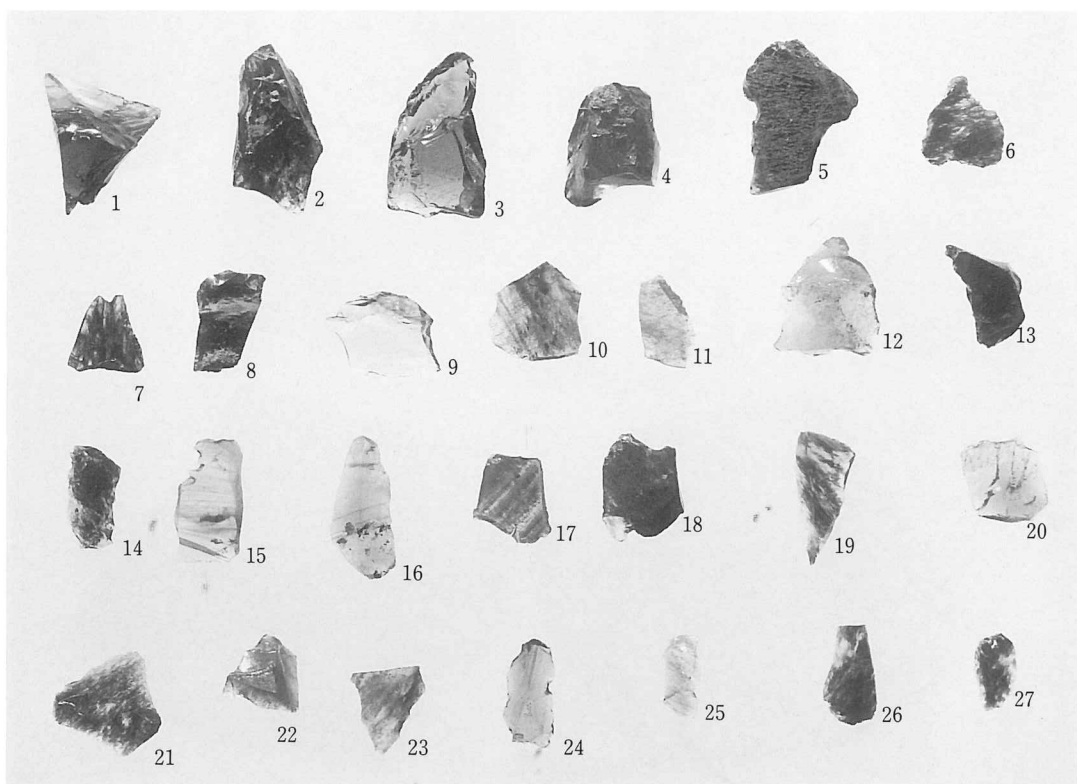
第3トレンチ (西から)



第2トレンチ出土遺物

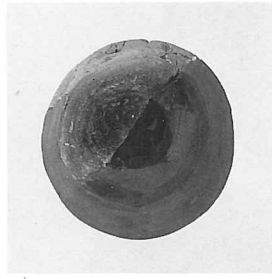


表面採集資料 (石鏃)

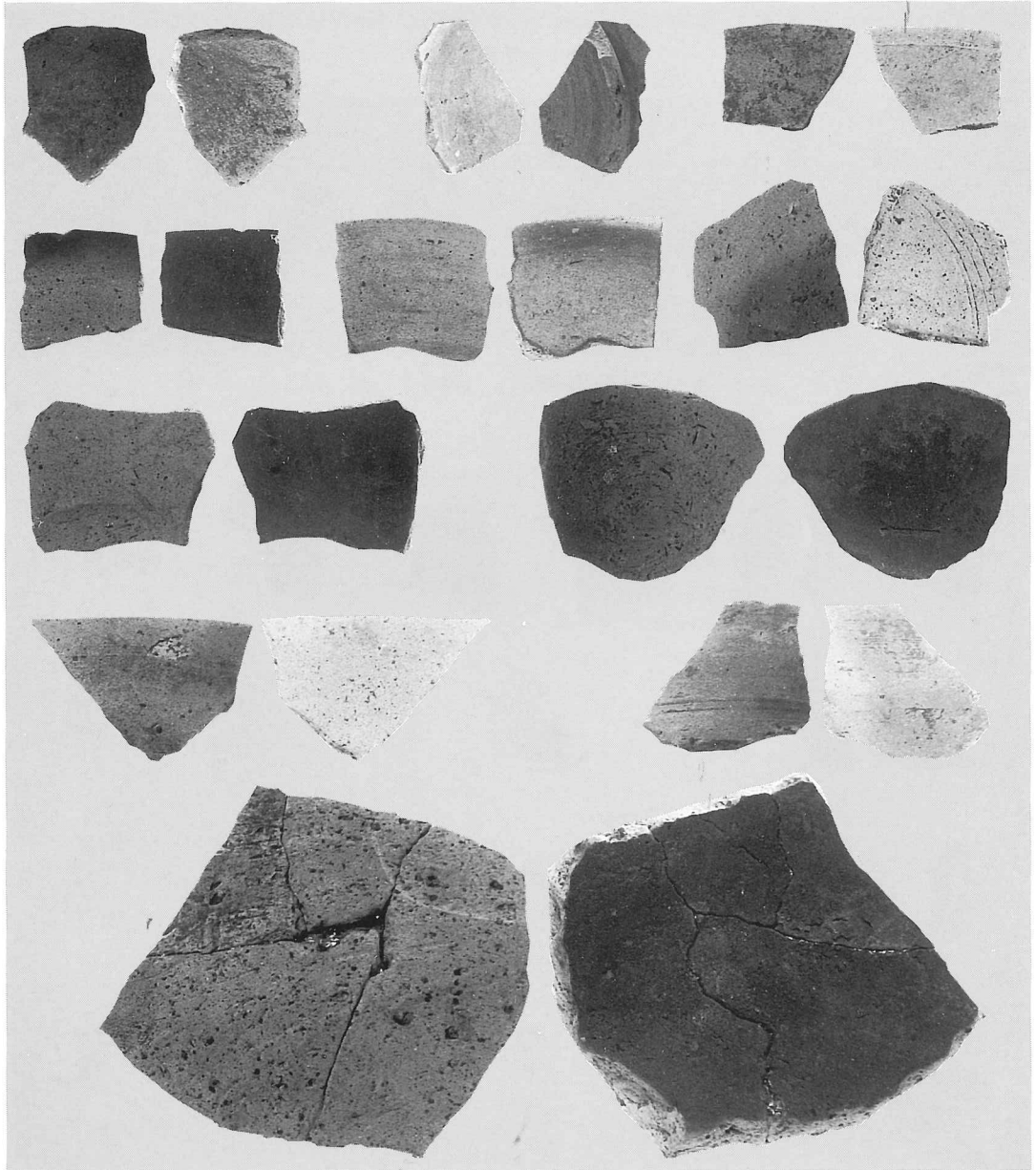


表面採集資料 (黒曜石剝片)

図版 7



試掘調査資料 (須恵器)



試掘調査資料

浅科村文化財調査報告書

- 第1集 『土合1号墳の調査』(1969年)
第2集 『矢鳴城跡』緊急発掘調査報告書(1985年)
第3集 『五郎兵衛用水』矢鳴城跡腰曲輪部に開した用水路の調査(1987年)
第4集 『矢鳴城跡』第2曲輪部の建築遺構(1988年)
第5集 『矢鳴城跡』主郭部の試掘調査(1991年)
第6集 『砂原遺跡』洪水に埋もれた耕地と古代の村(1993年)
第7・8集 『矢鳴城跡』村道2-8号線道路改良工事に伴う発掘調査(1996年)
第9集 『御馬寄古城跡』村道北-50号線道路改良工事に伴う発掘調査(1996年)
第10集 『寺田遺跡』古東山道・中仙道沿いの村(1995年)

浅科村文化財調査報告 第11集

いり さわ
入の沢遺跡

— 村道悪地山線農道改良工事に伴う発掘調査 —

発行 1997年3月

発行者 浅科村教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
